

透析施設における皮膚灌流圧（SPP）測定導入についての検討

上尾中央腎クリニック

○渡邊 ますみ、太田 恵、岩城 智美、佐藤 典明、遠藤 清文、吉江 祐

近年、食生活や生活様式の欧米化や高齢化社会の進展に伴い、動脈硬化を原因とする疾患が増え、末梢動脈疾患（PAD）も増加している。

透析患者においては、血管石灰化などの要因から動脈硬化を起こしやすい。さらに透析導入の原因疾患では糖尿病性腎症が1位となり、患者の高齢化も進み、PAD合併は増加している。下肢切断率も非透析患者に比べ高く、予後およびQOLに大きく影響する。

PADの機能的診断として、足関節上腕血圧比（ABI）が広く用いられているが、透析患者では、血管石灰化を高頻度に認め、正確に測定できない可能性がある。それに対し、皮膚灌流圧（SPP）では皮膚レベルの微小循環を評価対象とし、血管石灰化の影響を受けにくく、透析患者には有用であると考えられる。

当初、SPP測定を吸着療法の補助的診断のために導入していたが、他の患者にも施行したところ、それまで気付かなかった病態の発見・治療に結びつくケースを経験し、さらには治療効果の判定にも役立っている。

当院では、日々のフットケアや透析条件の検討、薬物治療や吸着療法の導入など、下肢切断を防ぐための治療を実施している。PADを早期発見・治療するため、SPP測定のルーチン化の必要性を示唆できる経験を得たので、ここに報告する。